

## # 371 人生を惨めにする世界観「わたしを離さないで」 VS 威風堂々の人生観

## カズオ・イシグロを読み解く

## ローマ人への手紙 3章 23-25 節

東住吉キリスト集会 高原 剛一郎 氏

\*-----\*-----\*-----\*-----\*-----\*-----\*-----\*-----\*-----\*-----\*-----\*-----\*

皆さん、こんにちは。今日はYouTubeを通して配信できますことを心から感謝しております。北京冬季オリンピックが始まりましたね。ちょうど2日前に開会式がありましたが、早速日本人選手がメダルを取って、これは素晴らしいことだと思います。

が、欧米のマスコミは、「今回のオリンピックはジェノサイド・オリンピック」と言っています。ヒトラーが国威発揚のためにやった1936年のベルリンオリンピックになぞらえて論評されることが、とても多いんですね。ベルリンオリンピックの時、開催前に、既にユダヤ人迫害が起こっていることを世界中が知っていました。それで、イギリスやアメリカが中心になって、「こんなオリンピック、ボイコットしようじゃないか」という声が上がったんですが、結局は実現しなかった。オリンピックが終わると、ヒトラーは本性むき出しにして、いよいよユダヤ人大虐殺に突き進んでいったんですね。

今中国の新疆ウイグル自治区で、ウイグル人が100万人とも200万人とも、ある人たちによると300万人とも言われる人たちが強制収容所に入れられて、臓器を抜かれたりして。ジェノサイド五輪と言われている理由はそこにあるのですが、この後のことが本当に心配です。

ところで、2日前の開会式の時、お馴染みのセレモニーがありましたね。聖火リレーです。聖火リレーは昔からあったんじゃない。誰が始めたか？ ヒトラーですよ。1936年のベルリンオリンピックで、プロパガンダを効果的にするために、オリンピック発祥の地ギリシアのオリンピアで採火して、松明にバトンタッチしながら色んな国を周って、最後ベルリンスタジアムに入って点火する。「我々ゲルマン民族こそは、ヨーロッパ文明の源流ギリシアの正式な後継民族である。」これがヒトラーの思想なんです。それをドラマチックに表すためにやった。

この時の聖火ランナーはどのルートを通ったのか？  
ギリシアのオリンピア⇒ブルガリア⇒ユーゴスラビア⇒ハンガリー⇒オーストリア⇒チェコスロバキア⇒ドイツのベルリン。

これ、逆進したら何のコースか分かりますか？ ドイツ軍が第二次世界大戦で、ヨーロッパに電撃戦を仕掛けて攻め込んで行った時のコースです。聖火ランナーが走ったこのコースは、ドイツ軍があっという間にヨーロッパを蹂躪するために取ったコース。なぜそんなことをしたのか？ ナチスドイツは「聖火ランナーがスムーズにバトンタッチできるよう、道路状況をチェックするために入らせてくれ」と、これらの国々に頼んでたんですね。そして、この道路情報を非常に正確に・精密に調査し、その結果を活用して軍事進撃に利用したんです。

独裁者が“平和の祭典”と言っている時は、必ず裏に何かがある。絶対的独裁者が“平和のために”“愛のために”“健康のために”などと言っている時は、何かもっとヤバイものをカモフラージュするために、そういうことを使っているのが多いと思いますね。それは今も同じです。

聖書を見ると、この世の神という存在について語っています。この世の神とは、この世界をお造りになった創造主のことではありません。この世の神って、いったい誰？ 悪魔のこと。サタンの別名です。この世の神はその存在が知られないように、知ってても知らなくてもいいように、何でもかんでもやる。要するに、この世界をお造りになった神なんか信じなくても十分幸せになれるよ。キリストを信じなくても十分にオッケーだよ。神なんか除外した人生を送っても、それは十分美しく、きらびやかで幸せになることができるよ。

しかし、きらびやかなことの背後には必ず闇がある。それを暴いているのが聖書です。聖書は情け容赦なく、この世界の闇について、この人生の真相について、つまびらかにしています。そこで今日は、ある有名なノーベル文学賞の作家のことから、聖書の福音をご一緒に考えたいと思います。

### ローマ人への手紙 3 章

**23.すべての人は罪を犯して、神の栄光を受けることができず、**

**24.神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いを通して、価なしに義と認められるからです。**

今日は 23 節をじっくり考えたい。罪とは神を除外すること。人生から自分の造り主を排斥すること。この世界のオーナーを人生から追放すること。創造主から離れて生きることを罪と言います。部屋の窓のシャッターを閉めたら太陽の光が入って来ないのと同じで、人生から創造主を追放したら、神の栄光を受け取ることはできません。

ところで、カズオ・イシグロ（1954- ）という日本生まれの国際的作家をご存知でしょうか。今から 5 年前にノーベル文学賞を取りましたね。『日の名残り』という作品でした。この作品は、ノーベル文学賞の数年前に、英語圏で最高の文学賞であるブッカー賞を取っています

カズオ・イシグロさんは長崎で生まれ、5 歳まで日本の幼稚園に行っていました。お父さんは海洋学者で、素晴らしい研究をしてイギリスの海洋研究所から招聘され、小学校に上がる頃に一家でイギリスに移住しました。だから、彼は日本語をほとんど話すことができません。英語の作家。まだ 8 作しか書いてないのですが、いやあ、凄い作家ですね。僕は、ノーベル文学賞取られるまで知りませんでした。

実は「ノーベル文学賞の作品よりも、こちらのほうがもっと上じゃない？」と、多くの文芸評論家が激賞している作品があるんです。『わたしを離さないで』。読みました。簡単に言うとこんな話です。

イギリスのある地方にヘールシャムという全寮制の寄宿舎学校があって、13 歳から 15 歳までの男子も女子も学んでいる。不思議な学校で、しつこいくらい やたらと健康診断するんです。私も年 1 回人間ドックに入るようにしてますけど、この学校は毎週。毎週健康診断。不思議なことに夏休みも冬休みもない。だから家に帰ることがなく、ずっと 3 年間、その学校で寝食を共にするんですね。主人公はキャシーという女の子。ルースという女の子とトミーという男の子、この 3 人の友情物語です。

どういうわけか、担任の先生のことを“先生”と呼ばないで“保護官”と呼ぶんです。担任の保護官の名前はルーシー。来年卒業の 15 歳になった 3 年生たちがルーシー保護官のところに来て、1 人の男の子が少年らしい夢を語りました。「僕、大人になったら俳優になりたい。映画スター。ハリウッドでデビューして活躍したい。だから、卒業したらアメリカに行くんだ！」するとルーシー保護官の顔が、もう苦悩に歪む。

そして、たまりかねたように「みんなに言うておくべきことがあります。」クラス全員集めて言いました。「皆さんは俳優になんかなれません。スーパーの店員にもなれません。おじいさんにもおばあさんにもなれません。中年にもならないでしょう。あなたたちは臓器提供のために作られたクローン人間です。皆さんの将来は決まっています。あなたたちの内臓を、クローンでない人たちに分け与えるために卒業するんです。ですから、妙な夢を描いて、後になってパニックを起こすようなことはやめてください。それがあなたたちの人生なのですから。」

ところが不思議なことに、それを聞いた生徒たちは、悲しいのは悲しいんだけど、誰もパニックにならない。誰も脱走しようと思わない。「なんでなんだー！」と叫ばない。みんな、前からうすうす分かっていたことを改めて聞いたという感じで、妙に落ち着いて受け入れるんですね。

15歳までしかこの学校におれない。さあ16歳になりました。16歳になると、貸別荘を改造したコテージみたいな所に三々五々集められ、キャシーとルースとトミーもそこに行きます。他の学校の人たちも集まっている。そこで臓器移植を待つんです。待つというか、自分は取られるんですよ。

実は、この学校を卒業したクローン人間たちは、将来2つのものにしかなれません。1つは臓器提供者。人体には腎臓とか2つある臓器がありますね。だから1回取られて終わりではなく2回3回。心臓取られたら1回目ダメでしょ。なので胃を取る。腎臓取る。膀胱取る。必要に応じて臓器を取られていく。

取られるたびに健康が損なわれ、体調が悪くなります。元気がなくなる。2回も3回も臓器が取られたら、次の手術で多分死ぬだろうと分かるんです。そんな提供者が恐怖で暴れたり、自殺しないように、介護人になるというもう1つの道があります。介護人は付きっきりで寄り添って、一緒に泣いたり励ましたり慰めたり。なぜそれができるかというと、介護人もいつか自分の順番が来る。一生介護人で終わることはない。最後は提供者になるという話ですよ。

キャシーは恋人のトミーの介護人になるのですが、彼は3回も手術受けてるんです。「俺は次で死ぬだろうなあ。大事な臓器がなくなって、七転八倒で苦しむだろう。そんなあさましい姿を君に見られたくない。俺の介護人から下りてくれ。」そうしてキャシーは首になるというか、去って行く。・・・ここで話は終わります。

これは、世界的にもものすごく評価が高いんですね。それは、神無き今の世界に生きている人間たちの人間観を見事に反映しているからではないかと思うんです。

この小説の中に出て来るのは2種類の人間で、ひと言で言うと勝ち組と負け組。勝ち組はちゃんと両親から生まれて来た人間。負け組はクローン技術によって作られた人間。勝ち組は生まれた時から勝ち組で、病気になった時は、クローン人間から必要な臓器をもらうことができる。クローン人間は、自分が病気になったとしても他の臓器をもらうことはなく、出すばかり。受け取る側と提供する側。もらう側と差し出す側。それが生まれた時から決まっている。

最近、“親ガチャ”って言葉、よく聞くじゃないですか。「こんな貧乏人の家に生まれて！」「こんな家庭崩壊の家に生まれて！」“ガチャ”分かりますか？ 当てもんじゃないもんや。私に言わせたら、アフガニスタンで生まれなくて日本で生まれたことが、そもそもメチャクチャ幸運なガチャの1つやと思いますけどね。人間というのはどんな人でも、比較したら惨めになりますよ。

それと同じで、生まれた時の家柄や経済状況、貧乏の家に生まれたのか金持ちの家かなど、生まれた時からもう宿命論的に決まっているみたいな考え方、ありませんか？ それを反映してますね。

それから、ここで描かれている世界観。読んでいたら、ほんとに気が滅入りますよ。

死というものの前に、人間は徹底的に無力であって、要するに人間は全員死ぬ。

臓器提供した者も受けた者も、両方ともいつか死ぬ。受けた人は数年間か十数年間、命を長らえることができるかもしれませんが、永遠に生きることはできません。いつか死ぬ。

勝ち組も負け組も両方とも、死の前には無力である。勝ち組は負け組に対しては勝ち組だけど、死に対しては負け組。死を前にした時、勝ち組の人間なんか誰もいない。

この地上にクローン人間はいませんよ。だけど数年前、中国でクローン猿ができたじゃないですか。

中国は無神論の国だから。今までは牛や豚、馬などのクローンを作ったことはあったんです。

が、霊長類、猿でやりましたね。だから、コピー人間を作る技術が一步手前まで来てるということでしょう。

この小説の中では、クローン人間たちが臓器取られて取られて、最終的にはがらんどうになって死ぬというね。取るところなくなったら、もうポイっ。

でも皆さん、いかがですか？ 先週1週間会社で働いて、或いは学校行って、色んな活動して。

人間はこの世界に生きている時、何か自分の大切なものを提供していませんか？

自分の時間や体力や精神をすり減らして、何か自分の大事な部分を削って削って誰かに提供して、最期はがらんどうになって、提供するものなくなって…死ぬ。

もし神がいなければ、人間はこの小説に出て来るクローンたちとあまり変わらないんじゃないか。

読みながら、そのことにすぐ気がつくようになります。そういう仕掛けがしてある小説です。

読者を甘やかさない作品ですね。

唯一ほっとするのは介護人と提供者の会話。というか介護人の存在です。

この介護人は運命共同体というか、自分もいつか提供者になるというので寄り添える。

タイトルが『わたしを離さないで』。これは小説の中に出て来るカセットテープの音楽からも来てるけど。

最後のほうで、4回目の手術の前に、トミーがキャシーに向かって言うんです。恋人同士ですよ。

「僕さあ、君との関係考える時、川の中に立ってる2人の人間を思い浮かべるんだ。

君と僕はすごい激流の川のご真ん中に立ってて、流れに押し流されないように踏ん張っているけど、自分の力だけでは踏ん張れないから互いにしがみついている。必死に。だけど流れが強すぎて、とうとう手が離れて、ばらばらに流されていくんだ。

これって、今の僕たちだね。今は友情を育て、悲しみを共有しているみたいに見えるけど、僕らは個別の死を経験する。死というものの前では、結局独りぼっちだよな。」

人生の本質に肉薄していませんか？ 唯一ほっとする「私を離さないで！」

でも、“人間は死ぬ”という運命の激流に抗うことができず、遂に手が離れて、それぞれ個別に流されて見えなくなってしまう。だから、慰められるかなと思っているところが、最後逆転で、やっぱりガッカリするんです。ラストシーンは、もう何とも言えんですよ…。原作読まれたらいいと思います。

これを読みながら、私つくづく思いました。人生の真実について、本当のことについて暴いてるなあ。

暴いているけど、ここには神が無い。神が無い人生観はこういうものです。

人生は、自分の大事なものを他の人に提供して提供して、最期がらんどろになって、役に立たなくなったらポイ捨て。そして、人は死の前で無力で、一人ひとりがばらばらに個別の死を死んでいく。それが人生だとしたら、なんと虚しいか。

「そんなこと考えないで、もっと楽しいことあるよ！」「オリンピックがあるよ！」「こんな楽しいこと、レクリエーション、趣味があるよ！」 キラびやかなことを次から次へと追い求め、一時的に忘れることができても、死という現実に対しては全く何も解決が無い。変わってない。これが 23 節の意味なんです。

### **23. すべて的人是罪を犯して、神の栄光を受けることができず、**

全ての人は神を排除し、その結果死が入った。そして、神を排除した人生観で生きている。

神を排除した人生観とは何ですか？ 最期は一人ひとりが、孤独のうちにばらばらになって死んで終わる。この世界では誰かに提供しておしまい。役に立っている間は大事にされるけど、役に立たなくなったらポイ捨て。これは聖書の価値観ではありません。

神がいなければ、そういう人生観・世界観になっても仕方がないでしょう。

では、聖書の人生観は何か？

### **24. 神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いを通して、価なしに義と認められるからです。**

神の恵みにより。神の恵みとは、弱い人に働く 強くする神の力。壊れたものの上に働く 建て上げていく神の力。暗闇の中にいる人間に一方的に光を差し込んでいく力。自力で立てなくなった人に新しいいのちを注がずにおれない神の一方的な愛のことです。

神の恵みはどこに働くんでしょう？

### **すべての人は罪を犯して、神の栄光を受けることができず、神の恵みにより、**

神の恵みはどこに係っていますか？ 神の栄光を受けることができなくなったすべての人です。

神の恵みは全ての人に働いています。

恵みは、罪を犯して神の栄光を受けることができなくなっている全ての人に働きます。

あらゆる宗教と福音の神は、どこが違うでしょう？ 恵みがあるかないかです。

他の宗教が作った神々と聖書の神は何が違うのか。恵みです。聖書の神の本質は恵みです。

神は全人類を救うために救い主を遣わす時 ユダヤ人を選びました。なぜユダヤ民族なんですか？

地上の民族の中で、その当時、一番小さい民族だったからと書いています。

なぜそんな特権を？ なぜそんな良い目に？ 一番小さかったから。一番小さな寄る辺のない民。

強い民を前にした時 脅かされる小さな民なので、神はその弱いところに一方的に働いて、人類最大のビッグプレゼントをユダヤ人を通して渡されたのです。

恵みということ考えた時、私はある宣教師を思い出します。

18 世紀、イギリス人のウィリアム・ケアリー (1761-1834) はインドで伝道しました。

彼は子供の頃から知識欲が旺盛で、もし図書館に 1 日預けておいたら、寝食忘れてずーっと本を読んでいるような少年。物知りで、本が好きで、勉強大好き。小さい時から「分からないことがあればウィリアムに聞け」と言われるくらい、知識欲が貪欲なほど旺盛な少年でした。貧しかったけど、知識に自信があるし、頭が良かったんですね。

でも、貧しさのゆえに上の学校に行けなくて、靴屋さんで丁稚奉公します。そこに先輩靴職人のお兄さんがいて、彼はクリスチャンでした。「ウィリアム、日曜日に教会に行かないかい？ イエス・キリストは君のために十字架に掛かって死ぬほどに、君のことを愛してくださったんだ。」

「あ〜、いいです、いいです。すみません。僕、そんなの要らないんで。そんなの頼るほど弱くないんで。そんな話は結構です。神にすぎるんじゃないんで、自分の知識にすぎるから結構です。」

あまりにもビシッと断ったので、この話題では、その先輩も中々近づくことができなかつたようです。

ある時、親方から町まで買い物に行ってくれと、1 シリングでしょうか、お金もらって。

そしたら、大きな本屋さんがあった。本に目がないウィリアムはフラフラと入って行ったんですね。

すると、もう何年にもわたって捜し続けていた本が 1 冊だけあったんです。「うわっ！あの本だ！」

今買わなければ、二度と遭遇することはないだろう。今手に入れなければ、二度と自分の物にできないだろう。それで、親方のお金に手を付けてしまった。

親方のお金でその本を買って、親方の頼まれ物を買って、おつりを袋に入れて、「親方、行って来ました。」親方が袋を開けると、お金が全然合わない。「おまえ、他に何か買ったのか？」「いいえ。」「おまえ、私の金で好きな物買ったんじゃないのか？」「いいえ。なんでそんなこと言うんですか？そんなことしてません。」「そうか。じゃあ、おまえの部屋調べるから。」

部屋に行くと、見たことないような高価な本が置いてある。「おまえの給料で、なんでこれを買える？」彼は盗みを働いたことを白状せざるを得なくなつたんですね。ほんとに恥ずかしいことでした。

彼は悲しみました。何にかというと、知識が増したら、勉強したら、神なんか要らない。

自分で立派な人間になれると思っていただけ、親方の信頼を裏切った。親方のお金を好きな物に使い、指摘された時 素直に認めることもできず、最後まで突っぱねて隠し通そうとした。

そしてバレた今、なんと惨めか。なんと不自由な人間か。僕は強くなんかない。弱い。正しく生きようと思っているのに、いざとなると、理想と全然違うことを平気でやっている。なんと弱い人間なのか。

その苦悩の中、クリスチャンの先輩が「だから、キリストが来てくださったんだよ」と言つたんです。

「キリストは立派な人間にご褒美を与えるために来たのではなく、自分では立派になり得ない 罪深い人間を救うためにこの世界に来られた。だからこそ、君にはキリストが必要だ。」「そうです。僕にはキリストが必要です。」

彼は 17 歳でイエス・キリストを受け入れて変わったんですね。もう喜びでいっぱい。罪赦された！

キリストが自分の中に入ってくださり、将来は輝かしいものになった。何ですか？ 永遠の天国。

この地上においても、神は私にプランを持っているに違いない。

これは大きな力となり、希望となりました。そして彼は、やがてインドに行くんです。

インドで（彼は語学の天才ですよ）、6 か国語の聖書を作りました。まずベンガル語。最後はサンスクリット語。サンスクリット語といたら、現存している言葉の中で、文法が最も難解な言葉ですよ。

6 か国語 全部訳すのに 40 年近く掛かって。それぞれの言葉で読めるように印刷機を手に入れ、印刷所を作って。そして聖書を配り、聖書を通して、たくさんのインドの人たちがクリスチャンになりました。今までヒンズーしか知らなかつたインドに、イエス・キリストの福音が入つたんです。

ところが、彼が寝てたら夜中に「ウィリアムさん、大変です！」印刷工場が火事！

彼が生涯を掛けたプロジェクトである印刷工場。飛び起きて敷地内を見たら、工場全体が猛烈な火炎に包まれて、あっという間に全焼です。

「早く、翻訳した原稿を運び出してくれ！ 5台しかない印刷機を、活版印刷の活字を運び出してくれ！」  
しかし、原稿は丸焼け。

私も以前『世界の流れを読む』という 中東問題について書いた本を出版したのですが、原稿を9割書き上げた段階で、私のミスで消えたんです。次にその原稿に取り掛かるのに2か月掛かりました。2か月間、八つ当たり。ふて寝。やる気失くした。気力が湧いて来ない。30年40年掛けて6か国語に翻訳した聖書の原稿が灰になったら、どんな人だって嫌になるんじゃないですか。

鎮火した後、彼は「祈ろう。神は恵み深い方。神は弱いところに働く。闇の所に光を差し込む。壊れたものを建て直す。ボロボロになっているものをまっさらにしてくださる。弱ければ弱いほど、神が働く力は強くなる。闇が暗ければ暗いほど、光が際だって明るく見えるように、人が落ち込めば落ち込むほど、駄目であるなら駄目であるほど、弱ければ弱いほど、その弱さの中に神の力は働く。」

そうして、気を取り直して工場の中に入ると、印刷機は焦げているだけで5台とも無事。原稿は焼けていたけど、既に組版が終わっている活字は、鉛の物は溶けて使い物になりませんが、鋼鉄製のほうは溶けていなかったんですね。「ここから、もう一度始めよう。」

これが世界的ニュースになったんです。“ウィリアム・ケアリーのバイブル印刷工場全焼”

これが欧米の新聞の一面トップにバーン出た。どうなったでしょう？

世界中から祈りが集まり、献金が集まり、最新の印刷機が10台届きました。

そして、立ち上がって頑張っていこうという姿に奮起したインド人の印刷工たちが立ち上がり、一流技術者たちがどんどん集まって、なんと火事から1か月後に、何倍もの生産能力となって再開したんです。

カズオ・イシグロ氏の世界観なら、「これが人生だ。努力してもパーになることがあるんだよ。」

聖書の世界観は違う。「弱いところにわたしの力は働くのです。わたしの恵みはあなたに十分です。」  
弱いところに神の力が働く。

ですから、もしあなたが今日侮辱されたら、そこに神様の力が働いていると考えたらいかがですか。

もしへこむようなことがあったら、そこにも神様の力が働いているんだと思ったらどうでしょう。

もし反対されて心がくじけそうなら、自分が気がついていないだけで、そこにも神様の注目が集まっていて、神の力が流れ込んでいると考えたらどうでしょう。

「そんなことが起こるはずがない！」という 神の方法より私の見方のほうが正しいという目には、神の恵みは見えません。恵みは、水が高い所から低い所に流れ込んで行くように、へりくだっている人のところに流れ込んで行くからです。

「聖書の人生観？あり得ない！俺の人生観のほうが現実的だ」と、自分の考え方を神の考えより上にする時、神は流れて行きようがないんです。水は低い所から高い所に流れないから。

恵みの水は高い所から低い所に行きます。

神はなぜ私たちを低くされるのでしょうか？ 恵みを与えたいからです。恵みを経験させたいのです。

すべての人は罪を犯して、神の栄光を受けることができなくなった。その全ての人に神の恵みが流れます。

神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いを通して、価なしに義と認められるからです。

贖いはギリシア語でアポルトロセオス。“市場で奴隷を買う” という意味・ニュアンスがあります。

奴隷は人間だけど物扱い。自分で自分の将来を決めることができない。良い主人に出会いたいと思っても、酷い主人に買われてしまったら、それを拒否できない。自分の権利は何もない。もの言う道具。それが奴隷です。

ちょっとシュミレーションしてみましょう。皆さんが奴隷としますよ。  
昔アメリカで奴隷売買がありました。それは競り市で、一番高い値を付けた人に売られます。  
奴隷ディーラーがあなたを商品として並べて、「さあ、彼どうですか？」  
1人のなんだか冷徹そうな人が「これ、買おうかな。こき使ってやろうか。」物扱い。

競りが始まってどんどん値段が上がっていき、これ以上は上がらないなという最終局面になった時、1人の紳士がパッと立ち上がって、最高値の1000倍の値段を付けたとします。  
どんな人も絶対に張り合えない超破格の値段。群衆は固唾を呑んで見守ることでしょう。  
ディーラーはこの話をすぐにまとめようと、「決まりました！」と直ちに確定するんじゃないですか。

その紳士は穏やかな方。あなたをこき使うのではなく、自由にするために、考えられないような代価を払いました。それがイエス・キリストです。イエス・キリストによる贖いとはそういうことなんです。  
キリストは“十字架と復活”の2つの働きを通して、あなたを罪と死の奴隷状態から解放してくださった方です。

私たちは自分で自分のことを選ぶことができない奴隷のように、死にたくないと思っても、死なない自由ってないでしょう？ 誰だって死にたくない。だけど、時が来たら死にます。どんなに自由人だと言っている人でも死の奴隷です。

なぜ死が入ったのか？ 神を除外するという罪の結果です。つまり、罪の奴隷なんです。  
正しく生きたいと思ってもできない。親切にしたいと思ってもできない。忍耐したいと思っただのに爆発しちゃった。罪の奴隷。死の奴隷。そして、最期は死という恐怖にこき使われておしまい。  
カズオ・イシグロの世界に落ちていくんです。私は真っ平ですね。

しかし、2000年前にキリストが十字架に掛かって、あなたのためにご自分のいのちで、ご自分の血潮で、あなたを買い取ってくださったのです。  
「もう死に怯えなくていい。もう罰に怯えなくていい。あなたの罪の罰は全部、わたしが十字架の上で引き受けたから恐れなくていい。」このキリストの十字架が贖いです。  
キリストはあなたのために代価を払いました。ご自分のいのちであなたを買い取ってくださった。

キリストは十字架に掛かり、墓に葬られて、3日目に復活することによって死を滅ぼしました。一度死なれました。復活するために。一度も死んだことがない人は復活できません。死んでないんだから。死んだ人だけが復活するチャンスがありますね。  
普通の人間は死んだらおしまいですが、キリストは死んで3日目に死を終わらせて、死んだらもう取り返しがつかない…のではない、という前例を遂に歴史上に現されたんです。

先日 シリアのイドリブ県で、イスラム国のリーダーがアメリカの特殊部隊によって暗殺されたのをご存知ですか？ イスラム国の最初のリーダーはバグダディ。2代目はアブイブラヒム・ハシミ。  
今世紀に入って、世界で一番人を殺したテロリストグループはイスラム国ですよ。  
そのトップがシリアのイドリブ県のこの建物にいる、ということアメリカは数か月前に掴んでいました。だけど、すぐに討伐しなかった。ハシミが非常に巧妙なことをしてたんです。

3階建ての3階に自分たち家族が住み、2階にイスラム国幹部の部下たちが住み、1階に全く関係ない一般市民が住んでいた。

今までアメリカがやって来たイスラムテロリスト暗殺方法は、ドローンによってピンポイントで倒していく。ハシミー家は建物から一步も出ないんですって。自分たちが上から見張られているのが分かっているから。それなら、建物を爆破しようか。しかし、1階の無実の住民が巻き添えを食らう。そこが狙い目なんです。関係のない人を抱き合わせにして、「俺を殺したら無実の人も死んでしまうぞ」と、人間を盾にして自分を守るという非常に卑怯なやり方をしていた。

それで、アメリカは陸上部隊（特殊部隊）を入れ、まず周囲を囲み、ヘリコプターで屋上に降りました。追い詰められたと感じた3階のハシミー家は自爆。2階の幹部連中は立て籠もって銃撃戦になったけど、1階の一般人の身柄を保護した上で突入し、最終的に米軍兵士の被害者はゼロです。

1階に住んでいた人たちは今 自由です。今までは、テロリストに出て行ってもらうことができなかった。そして、自分たちも出て行くことができなかった。自由がなかった。しかし、テロリストの親玉を滅ぼしたことによって、今やどこに住もうが自由！

私たちも人生から死を追放したい。でも追放できなかった。死なない人間になりたい。でも、そんなこと無理だった。しかしキリストは、死を滅ぼすことによって“人間がいつまでも死んだままで終わることはない。キリストが携拳・再臨する時、キリストを信じている人はみなよみがえる。復活に与る”と約束されました。

1階の自由人たちは、どのようにして自由になったのですか？ 悪の親玉が滅ぼされることによって。同じように、死の奴隷である私たちは、死が滅ぼされることによって自由になる。死の滅ぼしは復活です。キリストの十字架の死によって贖いが成り、復活によって死にピリオドが打たれた。それによって私たちは救われます。罪と死の結果から。

では、どうすればいいでしょう？

**25.神はこの方を、信仰によって受けるべき、血による宥めのささげ物として公に示されました。**

**この方（イエス・キリスト）を信仰によって受けるべき。**

修行じゃない。努力じゃない。信仰によって受け取るのです。

ところで、信仰というと何か非科学的で時代遅れ、原始人がやるみたいに思っている人がいますが、そんなことはない。

私は、今中国の北京でオリンピックが開催されていることを知っています。北京に行って確かめたわけじゃない。でも知ってるんです。なんで？ テレビでそのニュースやってたから。テレビのニュース信じたんです。

私は煙草が体に悪いことを信じてます。でも自分で実験したことない。なのに、なぜそんなこと言い切れるんですか？ 専門家がそう言ってるのを信じたんです。専門家だって間違ふことあるんじゃないですか？ でも私はそれを信じている。煙草が健康に悪いと信じている その信仰に対して、「そんな迷信、信じてるんですか」と言われたことは1回もありません。

昨日 新型コロナウイルスの感染者は1日で10万人を突破したそうです。私はそれを信じています。でも、10万人一人ひとりに面会して「ほんまに罹ったん？ PCR 陽性やったん？」と聞いて回ったこと

